

中国における言語評価

—浙江省の大学生を例にして—

宮本 大輔
MIYAMOTO Daisuke
(2005年度COE研究員・RA)

はじめに

本論は、北京、天津、上海、杭州（20,705元⁽¹⁾という中国第4位のPer Capita Gross Regional Product（以下PCGRPと略称⁽²⁾）を誇る浙江省の省都。他の3都市とは異なり、直轄市ではない）を研究対象地とした「中国人の言語評価」という研究課題の一環であり、主に以下の3点を目的とする。(1)杭州人を主とした浙江人の心中に存在する普通話⁽³⁾及び地方方言（regional dialect）に対するイメージのステレオタイプはどのようなものか、(2)7つの地方方言と数多くの局地方言（local dialect）を有する中国において、各方言の母語話者及び非母語話者によって各方言に対する評価及びイメージがどれほど異なるのか、(3)杭州の人々の上海語に対する言語評価に、中国を代表する大都市とその近辺に存在する中都市という上海市と杭州市の関係は何らかの影響を及ぼすのか。

分析の結果としては、以下の数点があげられる。(1)浙江人の普通話と蘇州語に対する評価には幾つかの類似点が見られる。(2)浙江人及び杭州人にとって最も心理的距離が近いのは普通話である。(3)評価項目「かっこいい」における広東語の評価の高さは、経済や流行といった面における高い威信に起因しているものと考えられる。(4)普通話は方言のモザイク地帯⁽⁴⁾といえる浙江省において、非常に高い威信を備えている。(5)杭州人の普通話に対する高い評価には、普通話と杭州語⁽⁵⁾の類似性が何らかの影響を及ぼしているのではないか。

中国国内の各方言に対する言語評価というのは、中

国人の心中には昔から存在しているものである。しかし、閑話として人口に膾炙されるばかりであり、目に見える形で示されることは為されてこなかった。易（2006）のようにエッセイ的なもの、つまり、自らの経験に基づいた主観的記述を行ったものはあるが、フィールドワークに基づいた実証的研究は中国国内外において十分に進んでいるとは言えない。

I 先行研究

日本においては、国内の方言に対する言語評価研究が多く見られる。その内のいくつかを例として取り上げたいと思う。

まず、井上（1978a・b）では、言語心理学の意味微分法（SD法）に基づいて、各方言と結びつく評価語を調べ、「方言イメージ」によって各方言を位置づけるということを試みている。この研究では、言語の評価によく用いられる17ペア34語を評価語として設定し、意味微分法に基づき評価を7段階にすることによって、インフォーマントの各方言（東京弁・東北弁・関西弁）に対する評価を細かく分析している。

また、言語編集部（1995）では、1994年秋から1995年春、札幌、弘前、仙台、東京、千葉、金沢、松本、大垣、京都、広島、高知、福岡、鹿児島、那覇の14地点において、調査票を配布し回収する、留置法を用いた調査を実施し、各地域における方言意識を分析している。更に、ここではネイティブ2,100名（1地点150名）を対象とした調査項目「あなたは、共通語が好きですか、嫌いですか」で「好き」と答えた人の割合を

共通語への心理的距離とみなし、地点ごとに東京（共通語の中心地と考える）との距離を地図上に示している。これによると、「好き」と答えたインフォーマントの割合が最も高かった那覇（57.3%）が東京に最も近く、最も低かった京都（24%）が最も遠くに位置している。

他者方言に対する言語評価研究の例としては、沖（1986）があげられる。ここでは、大阪における女子短大生の自己方言（大阪弁）、他者方言（京都弁、九州弁、東北弁、東京弁）及び標準語に対するイメージを記述し、方言イメージ形成の要因と過程について考察している。

上記した日本における言語評価の研究状況と比較すると、中国における言語評価研究は非常に数が少なく、またその研究対象も限られたものであると思われる。

陳（1999）は、言語態度を情的なものとする知的なものとの2つに分類し、それを更に個人的なものとする社会的なものとの2つに分類した。また、シンガポール華人を対象に、「好聴（美しい）、親切（親近感を覚える）、友善（友好的である）、有権威（威信がある）、文雅（上品である）、有身分（社会的地位が高い）、精確（正確である）、用処多（使用可能場面が多い）、方便（便利である）、容易（簡単である）」という10の評価項目を設定した言語評価調査をシンガポールにおいて実施し、二言語或いは三言語話者の英語、中国語（Standard Chinese）及び中国方言に対する言語評価について分析している。

また、倪等（2004）は、上海交通大学国際教育学院の全ての留学生を対象に、「好聴、親切、友善、有権威、文雅、有身分、精確、用処多、方便、容易」という陳（1999）と同じ10の評価項目を設定した言語評価調査を実施し、留学生427名の中国語（普通話）に対する言語評価及び中国語レベルが言語評価に及ぼす影響について分析している。その結果、外国人留学生の言語態度には、情感因子（好聴、親切、友善）、地位因子（有権威、文雅、有身分、精確）、適用因子（用処多、方便、容易）の3因子が含まれることを明らかにした。また、この調査のインフォーマントに関していえば、その職業や背景、中国語レベルは、彼らの中国語に対する言語意識には影響を及ぼしていないとも

結論づけている。

このように現在までのところ、中国人の各方言に対する評価を扱った学術的な研究は進んでいない。ただ、歴史的に見ると、随所に中国国内に存在する方言がそれぞれ異なる特徴を持っていることに言及した文言が見られる。その一例として、隋代に記された『顔氏家訓』には、次のような一節がある。「南方水土和柔、其音清舉而切詣、失在浮淺其辞多鄙俗。北方山川深厚、其音沈濁而（金化）鈍、得其質直其辞多古語。⁽⁶⁾（南方は風土が穏やかであるため、その発音も澄んでいて軽く、的確だが、短所は軽薄で言葉にも卑俗なものが多いことである。北方は、山河が起伏に富むため、その発音も濁って重々しく、歯切れの悪いところもあるが、長所は質朴で言葉に古語が多いことである。）」だが、これも易（2006）と同様に学術的研究ではなく、作者の経験に基づいた主観的記述であると考えられる。

ここまで取り上げた先行研究を見れば分かる通り、中国における言語評価研究は、香港、シンガポール、少数民族地域といった特殊な言語環境で生活を送る人々や在中外国人留学生を対象としたものばかりであり、中国国内の方言に対する言語評価についての学術的研究は進められていないように見受けられる。

これに対し、本論では研究対象を拡大し、中国における杭州人の自己方言／他者方言に対する言語意識と浙江人の他者方言に対する言語意識を調査することを試みた。

II 調査概要

1 調査地点及び調査対象

調査地点と場所：中華人民共和国浙江省杭州市浙江大学及び浙江工商大学

調査実施期間：2005年11月1日～11月14日

調査対象：浙江大学日本文化研究所大学院生及び浙江工商大学日本語学科学部生浙江省出身者、

男性：22名、女性：81名

年齢構成：17～24歳

調査対象は17歳から24歳の学部生及び大学院生であるため、本章の調査結果はこの年齢及び学歴を反映していると考えられる。

2 調査内容

調査には、自由記述式及び選択式の調査票を配布し回収する留置法を用い、自由記述式の部分では言語使用状況、選択式の部分では言語評価の実態を調査することを目的としている。具体的な調査票の内容は以下に示す通りである。なお、本論では自由記述式部分の言語使用状況については扱っていないので、ここでは割愛する。

選択式の部分については、表2に示したとおり、(a)上品、(b)親近感を覚える、(c)堅苦しい、(d)豪快である、(e)細やか、(f)実用的、(g)美しい、(h)カッコいい、といった言語を評価する上で比較的イメージしやすいと思われる8つの評価項目を設定し、それぞれの項目に①～⑥の選択肢を用意した。

表1 杭州調査 調査対象男女比

	男性	女性	合計2
杭州	5	25	30(29.1%)
寧波	4	13	17(16.5%)
紹興	6	6	12(11.7%)
温州	1	9	10(9.7%)
嘉興	2	6	8(7.8%)
台州	1	6	7(6.8%)
金華	1	5	6(5.8%)
麗水	0	5	5(4.9%)
湖州	0	3	3(2.9%)
衢州	1	2	3(2.9%)
舟山	1	1	2(1.9%)
合計1	22(21.4%)	81(78.6%)	103(100%)

表2 杭州調査 調査票内容 (選択式部分)⁽⁷⁾

あなたは××語についてどのように評価しますか？					
(a) ①上品である	②やや上品である	③普通	④余り上品ではない	⑤上品ではない	⑥分からない
(b) ①親近感を覚える	②やや親近感を覚える	③普通	④余り親近感を覚えない	⑤親近感を覚えない	⑥分からない
(c) ①堅苦しい	②やや堅苦しい	③普通	④余り堅苦しくない	⑤堅苦しくない	⑥分からない
(d) ①豪快である	②やや豪快である	③普通	④余り豪快ではない	⑤豪快ではない	⑥分からない
(e) ①細やかである	②やや細やかである	③普通	④余り細やかではない	⑤細やかではない	⑥分からない
(f) ①実用的である	②やや実用的である	③普通	④余り実用的ではない	⑤実用的ではない	⑥分からない
(g) ①美しい	②やや美しい	③普通	④余り美しくない	⑤美しくない	⑥分からない
(h) ①カッコいい	②ややカッコいい	③普通	④余りカッコよくない	⑤カッコよくない	⑥分からない

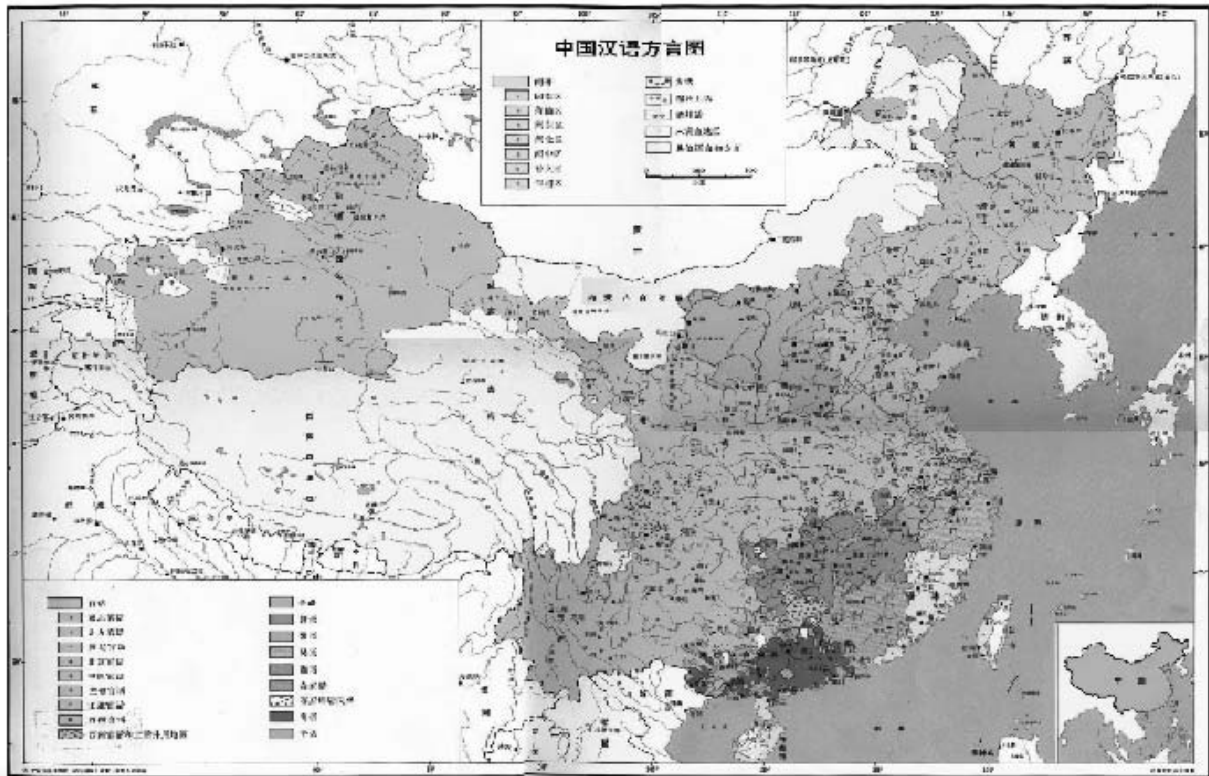


図1 中国の言語分布状況
(李荣・傅懋等 1989 より)

調査対象言語は、中国の威信言語である普通話、中国の十大地方方言から官話と晋方言、及び平話を除いた客家方言、吳方言、徽方言、贛方言、湘方言、閩方言、粵方言、一表中ではそれぞれ客家語、上海語、安徽語、江西語、湖南語、福建語、広東語の7つ、また調査実施地点の主要方言である杭州語、及びその周辺地域の吳方言の局地方言として、寧波語、温州語、紹興語、揚州語、蘇州語の5つ、そして、官話でありながら西南官話として独自の地位を確立していると考えられる四川語、その他、江南地域の人々によって一般的に認識されやすい北方の地方方言として山東語を設定した。

上記した中国の十大方言の位置関係については、図1を参照されたい。

III 言語評価についての調査結果

表3、表4は調査で得たデータを平均法によって数値化したもので、表2の(a)~(h)の各調査項目中のプラス・イメージである①、②にそれぞれ+2pt, +1pt, マイナス・イメージである④、⑤にそれぞれ-1pt,

-2pt, 中立及び不明回答である③、⑥には0ptを与え、評価項目ごとに得点順で並べたものである。但し、調査票において(c)「堅苦しい」だけはマイナスの評価項目であるため、データの集計・分析に際しては、便宜的に「堅苦しい」の反義語にあたる「柔らかか」を新たに評価項目として設定し、これに替えた。つまり、⑤堅苦しくない→①柔らかか、④余り堅苦しくない→②やや柔らかか、②やや堅苦しい→④余り柔らかかではない、①堅苦しい→⑤柔らかかではないとして集計したことになる。

表3は、浙江人全体から自己方言に対する評価、即ち、杭州人の杭州語に対する評価、寧波人の寧波語に対する評価、温州人の温州語に対する評価及び紹興人の紹興語に対する評価のデータを抜いたものである。つまり、全ての方言が他者方言として評価されていることになる。なお以後の文中及び表中で「浙江人」の評価と記した場合は、この浙江人全体から自己方言に対する評価を抜いたものを指すこととする。

全体的に見ると、「豪快である」及び「かっこいい」という評価項目を除く全ての評価項目において、普通話が1位となっている。また、蘇州語も評価項目「上

表3 平均法による各方言の評価語の序列（「浙江人」）

順位	上品	親近感を覚える	柔らか	豪快である	細やか	実用的	美しい	かっこいい	総合
1	普通話 0.67	普通話 0.76	普通話 0.6	山東語 0.37	普通話 0.53	普通話 1.39	普通話 0.65	広東語 0.21	普通話 0.53
2	蘇州語 0.25	蘇州語 0.21	広東語 0.31	四川語 0.06	蘇州語 0.33	広東語 0.15	蘇州語 0.26	揚州語 0.02	蘇州語 0.13
3	揚州語 0.1	紹興語 0.2	杭州語 0.29	湖南語 0.03	揚州語 0.17	杭州語 0.03	広東語 0.15	蘇州語 0.02	広東語 0.07
4	紹興語 0.02	揚州語 0.11	蘇州語 0.27	紹興語 0.02	杭州語 0.07	寧波語 0	紹興語 0.13	山東語 0.01	紹興語 0.07
5	寧波語 0.01	杭州語 0.1	上海語 0.23	客家語 -0.01	紹興語 0.07	紹興語 0	揚州語 0.12	杭州語 0	揚州語 0.07
6	広東語 -0.06	寧波語 0.08	紹興語 0.22	寧波語 -0.05	寧波語 0.01	揚州語 -0.02	寧波語 0.02	客家語 -0.01	杭州語 0.01
7	杭州語 -0.07	客家語 0.01	揚州語 0.22	広東語 -0.06	客家語 -0.06	客家語 -0.08	客家語 0.01	四川語 -0.06	寧波語 0
8	客家語 -0.09	広東語 -0.01	福建語 0.14	普通話 -0.08	湖南語 -0.12	蘇州語 -0.08	杭州語 -0.03	紹興語 -0.07	客家語 -0.02
9	四川語 -0.19	山東語 -0.01	温州語 0.1	江西語 -0.11	広東語 -0.12	山東語 -0.1	山東語 -0.07	福建語 -0.08	山東語 -0.05
10	温州語 -0.2	四川語 -0.08	客家語 0.06	揚州語 -0.13	上海語 -0.14	福建語 -0.17	湖南語 -0.11	寧波語 -0.08	四川語 -0.09
11	福建語 -0.23	湖南語 -0.17	四川語 0.06	福建語 -0.14	安徽語 -0.16	四川語 -0.17	福建語 -0.15	温州語 -0.12	湖南語 -0.12
12	湖南語 -0.27	福建語 -0.19	湖南語 0.01	安徽語 -0.14	四川語 -0.17	湖南語 -0.19	四川語 -0.17	湖南語 -0.13	福建語 -0.13
13	山東語 -0.27	温州語 -0.23	寧波語 0.01	蘇州語 -0.21	温州語 -0.2	安徽語 -0.21	安徽語 -0.22	江西語 -0.16	安徽語 -0.19
14	安徽語 -0.27	安徽語 -0.24	山東語 -0.02	温州語 -0.22	福建語 -0.21	江西語 -0.25	江西語 -0.27	安徽語 -0.17	温州語 -0.2
15	江西語 -0.3	上海語 -0.32	江西語 -0.03	杭州語 -0.32	江西語 -0.25	上海語 -0.38	上海語 -0.31	普通話 -0.29	江西語 -0.22
16	上海語 -0.52	江西語 -0.36	安徽語 -0.09	上海語 -0.53	山東語 -0.31	温州語 -0.39	温州語 -0.32	上海語 -0.32	上海語 -0.29

品」,「親近感を覚える」,「細やか」,「美しい」,「かっこいい」において2位に位置しており,評価の高さをうかがい知ることができる。また,上海語が「上品」,「豪快である」,「実用的」,「美しい」,「かっこいい」という5つの評価項目において最下位となっているのも特徴的である。

表3の各言語の評価順位から,「浙江人」の普通話と蘇州語に対する評価の共通点が見える。両者とも「上品」,「親近感を覚える」,「柔らか」,「細やか」,「美しい」において高得点をとっており,「豪快である」では共に低い評価(普通話:-0.08pt,蘇州語:-0.21pt)を下されていることである。逆に,普通話と蘇州語に対する評価で異なっているのは,普通話は「実用的」でも1位(1.39pt)をとっているが,蘇州語の順位は7位(-0.08pt)と低いことだろう。

ここには,「浙江人」のある種の矛盾が表れている。実用的ではない蘇州語(-0.08pt)に対して,普通話に対するものと同様の羨望(上品:0.25pt,親近感を覚える:0.21pt,細やか:0.33pt,美しい:0.26pt)を抱いているのだ。それだけ蘇州が高い歴史的・文化的威信を有しているということなのだろうか。

一方,表4は杭州人の各方言に対する評価であり,インフォーマントの構成を見れば分かるように調査地点が杭州市であることから,杭州人の占める割合が最も高いため,ここでは特に杭州出身のインフォーマントを抽出し,杭州人の自己方言に対する評価及び他者方言に対する評価を分析している。

全体的に見てみると,やはり「浙江人」の評価とは異なり,評価項目「柔らか」,「細やか」において杭州人にとっての自己方言である杭州語が1位となっており,他の評価項目においても上位に位置しており,マイナス・イメージは1つもない。また,ここでも上海語のイメージは低く,「上品」,「豪快である」という評価項目において最下位となっている。さらに,その他の評価項目においても上海語に対する評価は低く,「親近感を覚える」,「実用的」,「美しい」,「かっこいい」では,それぞれ-0.33pt(14位),-0.47pt(15位),-0.4pt(15位),-0.43pt(15位)となっている。唯一,「柔らか」において0.47ptと高い数値を示している。

ここで最も特徴的といえるのは,普通話の「かっこいい」における評価が最下位(-0.63pt)となってい

表4 平均法による各方言の評価語の序列（杭州人）

順位	上品	親近感を覚える	柔らか	豪快である	細やか	実用的	美しい	かっこいい	総合
1	普通話 0.63	普通話 0.9	杭州語 1.07	山東語 0.37	杭州語 0.6	普通話 1.5	普通話 0.6	広東語 0.33	杭州語 0.52
2	蘇州語 0.3	杭州語 0.77	普通話 1.03	広東語 0.03	普通話 0.37	杭州語 0.77	杭州語 0.5	杭州語 0.17	普通話 0.51
3	杭州語 0.27	紹興語 0.3	上海語 0.47	湖南語 0	蘇州語 0.37	広東語 0.17	紹興語 0.33	福建語 0.07	蘇州語 0.11
4	寧波語 0.03	蘇州語 0.27	揚州語 0.47	客家語 0	紹興語 0.2	紹興語 0	広東語 0.2	湖南語 0.03	広東語 0.1
5	揚州語 0.03	揚州語 0.2	蘇州語 0.37	杭州語 0	揚州語 0.2	湖南語 -0.03	蘇州語 0.2	客家語 0	紹興語 0.1
6	広東語 0	寧波語 0.17	紹興語 0.33	紹興語 0	寧波語 0.03	寧波語 -0.03	客家語 0.1	蘇州語 0	揚州語 0.04
7	客家語 -0.17	客家語 0.13	広東語 0.23	四川語 -0.03	福建語 -0.03	客家語 -0.07	寧波語 0	揚州語 -0.03	客家語 0.02
8	紹興語 -0.17	広東語 0.03	客家語 0.17	江西語 -0.07	客家語 -0.03	揚州語 -0.13	揚州語 0	四川語 -0.07	寧波語 0
9	四川語 -0.23	四川語 -0.1	寧波語 0.17	福建語 -0.13	上海語 -0.07	福建語 -0.17	福建語 -0.1	寧波語 -0.13	福建語 -0.08
10	江西語 -0.27	福建語 -0.13	福建語 0.13	安徽語 -0.2	江西語 -0.13	山東語 -0.17	江西語 -0.17	温州語 -0.13	四川語 -0.12
11	福建語 -0.27	湖南語 -0.17	温州語 0.13	寧波語 -0.27	湖南語 -0.17	蘇州語 -0.2	湖南語 -0.2	山東語 -0.13	湖南語 -0.13
12	山東語 -0.33	山東語 -0.2	四川語 0.1	普通話 -0.33	広東語 -0.17	江西語 -0.23	四川語 -0.2	江西語 -0.17	山東語 -0.15
13	湖南語 -0.4	安徽語 -0.27	山東語 0	温州語 -0.37	四川語 -0.2	四川語 -0.23	安徽語 -0.27	安徽語 -0.2	江西語 -0.19
14	温州語 -0.43	上海語 -0.33	安徽語 -0.03	揚州語 -0.4	安徽語 -0.27	安徽語 -0.27	山東語 -0.3	紹興語 -0.23	安徽語 -0.24
15	安徽語 -0.43	江西語 -0.37	湖南語 -0.07	蘇州語 -0.43	温州語 -0.43	上海語 -0.47	上海語 -0.4	上海語 -0.43	上海語 -0.33
16	上海語 -0.7	温州語 -0.4	江西語 -0.13	上海語 -0.73	山東語 -0.47	温州語 -0.53	温州語 -0.5	普通話 -0.63	温州語 -0.33

ることだろう。「実用的」においては、非常に高い評価(1.5pt)を得ているにもかかわらず、「かっこいい」においては、これほど低い評価となっていることから、杭州人の心中における普通話の威信の高さは、その実用性に裏打ちされたものだけということができよう。

また、「親近感を覚える」、「美しい」では、紹興語が普通話、杭州語に次いで3位となっている。李(1998)によれば、杭州と紹興はかつて往来が非常に盛んで、杭州には「杭州蘿蔔紹興種⁽¹⁷⁾(多くの杭州人の原籍は紹興である)」という諺が残っている。杭州人の紹興語に対する評価の高さはこのことに起因している可能性がある。

歴史的観点から見ると、「呉越同舟」、「臥薪嘗胆」などといった故事が示すように、呉⁽¹⁸⁾と越⁽¹⁹⁾は所謂犬猿の仲であった。だが、その一方で、二つの方言が隣接していること、さらには杭州市と蘇州市が江南運河によって結ばれていることなどから、両都市間には古くから文化的・経済的交流を持っており、対立と連携の二つのベクトルを持つ関係にあったと考えられる。このような歴史的背景が現代の言語評価にどのような影響を及ぼしているのだろうか。実際に調査結果を見てみ

ると、「浙江人」の蘇州語に対する「美しい」における評価は2位(0.26pt)、杭州人の評価は4位(0.2pt)となっている。杭州人の蘇州語に対する評価は「浙江人」のそれと比較すると低く、逆に杭州人の紹興語に対する評価(0.33pt)の方が0.3pt高い。しかし、それでも蘇州語に対する評価はマイナス値を取っているわけではなく、杭州人は蘇州語に対して悪いイメージを抱いているとはいえないだろう。

また、杭州人の自己方言に対する総合評価⁽²⁰⁾は、普通話に続く高さとなっており、杭州人が自己方言に対してマイナス評価を下していないことから、自己の方言をスティグマ⁽²¹⁾(stigma)と見なしていないことがうかがえるが、それ以上に普通話をRP(Received Pronunciation)⁽²²⁾として受容しているという事実がこの評価順位に現れているのではないだろうか。また、杭州語は臨安時代(A.D.1128-1276)に、この当時から用いられ始めた北京語を基礎とした北京官話の影響を多分に受けたため、周りの呉方言とは異なり、半官話と称されることから普通話との共通点は多いと考えられる。例えば、杭州語は語尾の「儿」が非常に発達しており、人称代名詞には、「儂(あなた)」、「伊

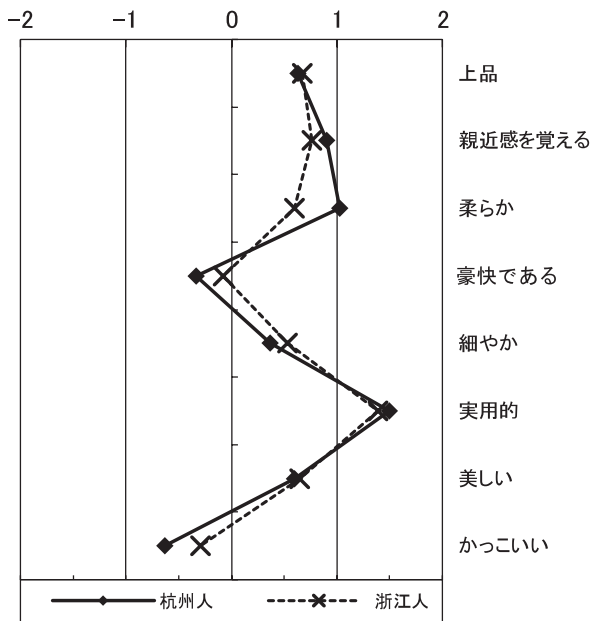


図2 普通話のイメージ

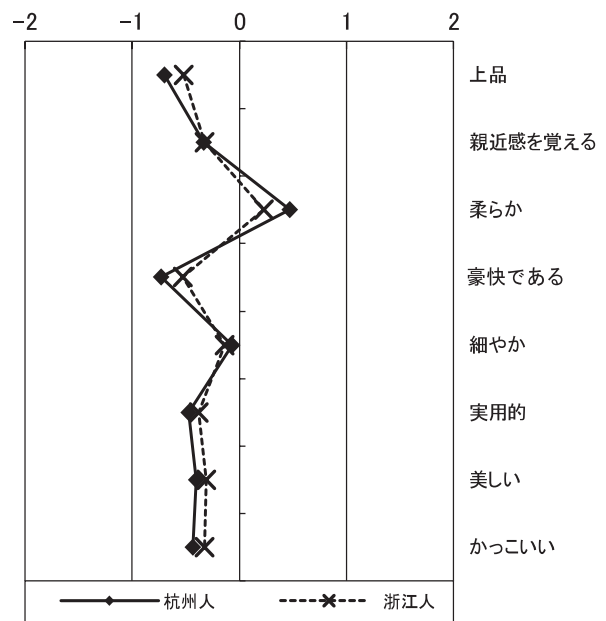


図3 上海語のイメージ

(彼)」といった伝統的な呉語タイプが用いられず、全て北方方言の「我(私)」、「你(あなた)」、「他(彼)」を用いている。これはみな杭州語が北方官話の方向へ近づきつつあることの明証である⁽²³⁾。これに、今日に至りテレビが普及したことによって普通話の普及速度が急速に高まったことも合わさり、杭州語はより一層北方官話へと近づきつつあると考えられる。この普通話と杭州語の類似性と杭州人の普通話に対する高い評価との間には何らかの相関性が存在するようにも考えられる。

図2～6はインフォーマントの各言語に対する各評価項目における評価ポイントの平均値をグラフ化したものである。

図2では、杭州人と浙江人の評価平均値はほぼ重なっており、「柔らか」において杭州人の評価が多少低くなってはいるものの、両者の普通話に対する評価は共通のものと言っていいだろう。「豪快である」及び「かつこいい」ではマイナス値をとっているものの、その他の6項目においては、全ての調査対象言語の中で、最も高い値を示している。このことから、普通話は方言のモザイク地帯とも言える浙江省においても非常に高い評価を得ていることが分かる。

図3はインフォーマントの上海語に対する各評価項目における評価ポイントの平均値をグラフ化したもの

である。ここでは、杭州人と浙江人の評価平均値はほぼ重なっている。「柔らかである」以外の全ての評価項目においてマイナス値となっていることが非常に特徴的である。このような杭州人を中心とした浙江人の上海に対するマイナス・イメージを生み出した原因はいくつかあると考えられる。紹興には越の都が、杭州には南宋の都が置かれたことがあるのと比較すると、上海は歴史が浅く、以前は小さな漁村だったこともあり、浙江人は上海に対して文化的優越感を有しているためだとも考えられる。また、その一方で、現在PCGRPが中国国内トップである上海(55,307元)⁽²⁴⁾をライバル視している浙江人(浙江のPCGRPは23,942元)⁽²⁵⁾的要因が多分に影響を及ぼしているとも推測できる。

また、上海語に対する評価がこれほど悪いのは何故だと思いか、と数名の上海人に質問してみたところ、「大部分の上海人が外地人を見下しているため、外地人の上海人に対する評価が下がり、それに伴って上海語に対する評価も低下した。また、上海に対して低い評価を下すのは、杭州人に限ったものではない。」⁽²⁶⁾という回答が得られた。

図4は、インフォーマントの広東語に対する各評価項目における評価ポイントの平均値をグラフ化したものである。「柔らか」が突出し、「かつこいい」の値が

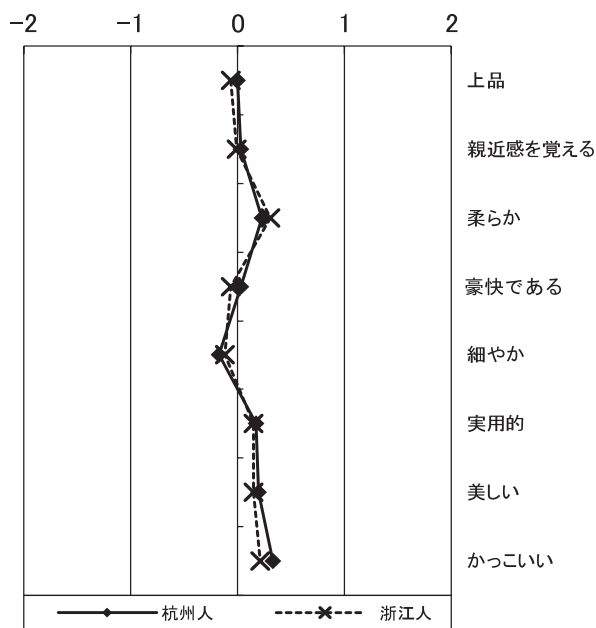


図4 広東語のイメージ

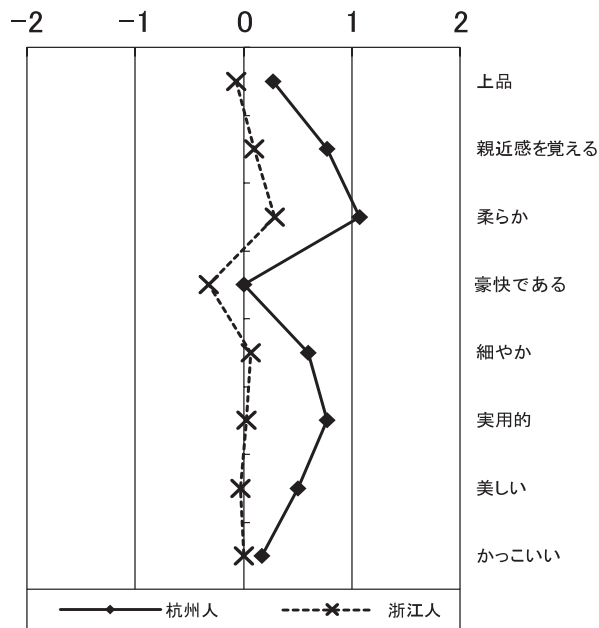


図5 杭州語のイメージ

他の調査対象言語の数値と比較すると最も高いことが特徴的である。本来、意味的には非常に近いはずの「柔らか」と「細やか」の値が相反していることも興味深い。「かつこいい」における広東語に対する高い評価は、おそらく、1980年代に香港発のテレビドラマが一世を風靡し、人々の広東語に対する評価が格段に上昇したのを皮切りに、数多くの香港出身の流行歌手が人気を博したことで、高い評価を保ち続ける広東語のイメージと、1997年にイギリスから返還され、現在では特別行政区に指定されている香港に対する都市イメージの高さが相まってこのような広東語の評価を生み出したのだと考えることができる。

図5は、インフォーマントの杭州語に対する各評価項目における評価ポイントの平均値をグラフ化したものである。「豪快である」においてのみ中間値(0pt)をとっている。杭州人が、自らの母方言である杭州語に対して高い評価を下すという現象は、当然のことであるように思われる。だが、母方言に対する評価であるからといって、盲目的にこれを高く評価しているわけではなく、杭州語に対する評価を把握していることが、評価項目「豪快である」における評価の低さに現れていると考えられる。

図6はインフォーマントの安徽語に対する各評価項目における評価ポイントの平均値をグラフ化したもの

である。安徽語は紹興語とは逆に、各評価項目の平均値が全てマイナス値をとっている。安徽省のPCGRPは7,768元⁽²⁷⁾となっており、その経済状態は調査対象として設定した方言の中でもかなり低い。また、安徽省の15歳以上の非識字者(半非識字者を含む)は7,390人と中国全体の15歳以上の非識字者(半非識字者を含む)の7.1%を占める⁽²⁸⁾。さらに、安徽省から流出した出稼ぎ労働者の多くが、安徽省の東南に位置し、比較的経済が発展している浙江省に流入している。安徽語に対する言語評価の低さは、その都市イメージの影響を多分に受けているものと考えられる。

だが、総合評価では、安徽語に対する評価よりも上海語に対する評価の方が更に低くなっている。これには、浙江人—特に杭州人が上海人をライバル視している、という心理的要因が深く関わってくると考えられる。おそらく、杭州人は安徽人に対して何のライバル心も抱いていないのだろう。故にそこには利害関係が生じず、言語評価も上海に対するものほどは低くなかったのではないだろうか。

おわりに

ここまで述べてきた調査結果から、浙江省における普通話の威信の強さを垣間見ることができたのではな

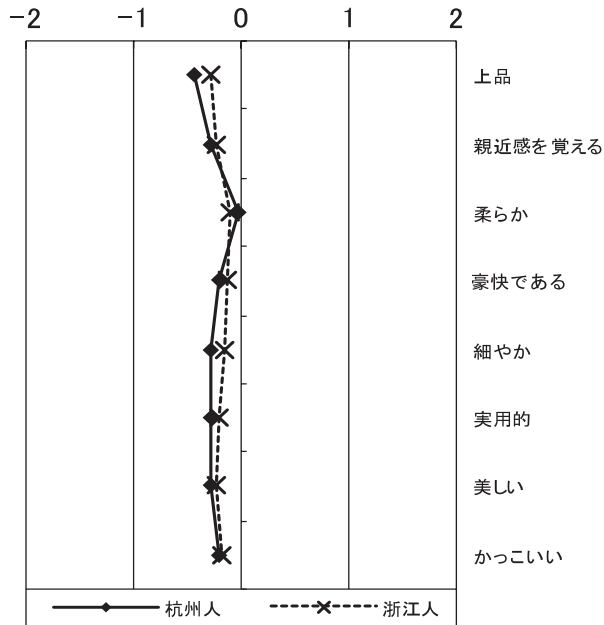


図6 安徽語のイメージ

いだろうか。また、一般的に言語に対する評価というものは、その言語を有する地域の経済状態や流行と密接に関わっている場合が多く見られる。実際に、今回の調査でも内陸に位置し、経済状態が芳しくない安徽省の安徽語や、中国の人々の間で非常に理解しにくいとされている温州語⁽²⁹⁾に対する評価は非常に低くなっている。しかし、今回の調査では興味深いことに、中国では経済が最も発展していると思われる上海の方言に対する評価が最も低いという結果が出ている。この上海語に対する評価は単に浙江人全体及び杭州人の上海に対するライバル意識によるものなのか、近代としてここ100年の間に急成長してきた上海に対する従来の言語意識が追いついてきているからか、また、他の地域においてはどのように評価されているのか、そして上海語の母語話者たちは杭州語を含めて周りの方言をどう評価しているのだろうか。今後の課題として深く探究していくべき問題である。

付記

本論は筆者が2005年11月1日～14日に、神奈川大学COE研究員(RA)として浙江大学に派遣された際実施した調査に基づいたものである。

注

- (1) 中華人民共和国国家統計局 2005:60-61
- (2) 一人あたりの平均地域別国内総生産額を指す。
- (3) 1956年2月に國務院が公布した『關於推广普通話的指示』(普通話普及に関する指示)において、正式に以下のように規定された。「①北京語音を標準音とする、②北方方言を基礎方言とする、③典型的な現代白話著作を文法規範とする。」(漢語大辭典 1990:5-777より訳出)
- (4) 実際、アンケート調査の回答にも調査言語として設定した杭州語、寧波語、温州語、紹興語を含め、42もの細かな局地方言が確認されている。
- (5) 臨安府時代に杭州語は多分に官話の影響を受けたため、半官話として一般的な呉方言とは区別され、ある種の方言島を形成している。
- (6) 「顔氏家訓」卷下・音辭篇十八(欽定四庫全書 848-984)
- (7) 本文中では日本語に訳しているが、実際の調査では中国語簡体字を使用している。
- (8) 主に山西省(78縣市)、河北省(35縣市)、内モンゴル自治区(28縣市)、河南省(18縣市)等の地域において用いられる。使用人口は約5000万人に達する。(蔡・郭 2001:153-154; Grimes 2000:404)
- (9) 主に広西チワン族自治区西南部において用いられる。使用人口は約250万人に達する。平話は官話と湘方言に近い桂北平話と粵方言に近い桂南平話に分けられる。(蔡・郭 2001:207)
- (10) 主に広東省東部、中部、福建省閩西山区、江西省西部で用いられ、この他、広西省、湖南省、四川省、台湾などにも分布する。人口は約4000万人に達する。(蔡・郭 2001:164; Grimes 2000:404)
- (11) 主に浙江省、江蘇省南部及び上海市において用いられる。この他、江西省皖皖南及び福建省浦城北部にも呉方言の一部が見られる。呉方言の使用人口は約7500万人に達する。(蔡・郭 2001:285-286; Grimes 2000:406)
- (12) 主に江西省の贛江中、下流、撫江流域及び鄱陽湖地域において用いられる。使用人口は約3500万人に達する。(蔡・郭 2001:82; Grimes 2000:404)
- (13) 主に湖南省において用いられ、江西省全州、資源等の一部の縣市にも分布する。湘方言の使用人口は約3200万人に達する。(蔡・郭 2001:296; Grimes 2000:406)
- (14) 主に福建、台湾、海南の3省及び広東省潮汕地域の12縣市において用いられる。使用人口はおよそ4000万人に達する。閩方言はその下位方言として、閩北語と閩南語を有するが、この二つは相互にコミュニケーションをとることはできない。(蔡・郭 2001:195; Grimes 2000:405-406)
- (15) 主に広東省珠江デルタ、広東省西部、広西チワン族自治区東南部において用いられる。使用人口は約4500万人に達する。(蔡・郭 2001:195; Grimes 2000:406)
- (16) 主に安徽省南部新安江流域の旧徽州府において用いら

- れる。この他、安徽省、浙江省北部、江西省の16の県市に分布する。使用人口は約350万人に達する。(蔡・郭 2001:137; Grimes 2000:404)
- (17) 李榮 1998:16
- (18) 江蘇省南部と浙江省北部
- (19) 浙江省東部
- (20) 高雅から酷までのポイントを平均したもの。
- (21) 否定的な社会的アイデンティティをもたらす属性。(上瀬 2002:88)
- (22) 容認発音
- (23) 詹 1983:143
- (24) (1)と同じ。
- (25) (1)と同じ。
- (26) 上海人留学生(26歳・男性)
- (27) (1)と同じ。
- (28) 中華人民共和国国家統計局 2005:107
- (29) 沈・沈 2004:8 「正由于温州話在語音, 語法等各方面都有与衆不同的特点, 温州話才成爲一種特別難懂的方言。」(温州語は音韻, 文法等の各面において他と異なるため, 温州語は非常に分かり難い方言となった。)

引用文献

易中天

2006『読城記』上海：上海文芸出版社。

井上史雄

1978(a)「方言イメージの多変量解析(上)」『言語生活』311:82-91.

1978(b)「方言イメージの多変量解析(上)」『言語生活』312:82-88.

沖裕子

1986「方言イメージの形成」関西大学『国文学』63:1-15.

上瀬由美子

2002『ステレオタイプの社会心理学—偏見の解消に向けて—』東京：サイエンス社。

顔之推

1989「顔氏家訓」『欽定四庫全書』上海：上海古籍出版社。

Grimes, F. Barbara (ed)

2000 Ethnologue. SIL International.

言語編集部

1995『変容する日本の方言』東京：大修館書店。

詹伯慧

1983『現代漢語方言』(樋口靖訳) 東京：光生館。

蔡富有・郭龍生主編

2001『語言文字学常用辞典』北京：北京教育出版社。

大東亜文化大学中国語大辞典編纂室編

1994『中国語大辞典』東京：角川書店。

沈克成・沈迦

2004『温州話文化研究』寧波：寧波出版社。

陳松岑

1999「新加坡華人的語言態度及其對語言能力和語言使用

的影響」『語言教学与研究』1999(1):81-95.

李榮主編

1998 杭州方言詞典 現代漢語方言大詞典・分卷 南京：江蘇教育出版社。

李榮・傅懋等編

1989『中国語言地図集』第二分冊 香港：香港朗文出版(遠東)有限公司。

中華人民共和国国家統計局

2005『中国統計年鑑—2005』中国統計出版社。

[2006年10月31日受理, 11月17日審査終了]